

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00594

研究課題名(和文) ベンガル語音象徴システムの意味論的研究—文学作品コーパスの構築と表出語辞典の作成

研究課題名(英文) Semantic Research in the Sound-Symbolic System of Bangla

研究代表者

大西 正幸 (Onishi, Masayuki)

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

研究者番号：10299711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はベンガル語の音象徴システムを代表する表出語のコーパスの構築、表出語辞典の作成、およびこれらのデータに基づく表出語の言語学的分析をめぐる論文の執筆を目的とした。プロジェクトの最大の成果は、大西と研究協力者Dattaの共著による表出語の形態論・意味論的分析を扱った論文と、研究協力者Sarkarの表出語の文学における使用を扱った論文の出版である。また大西は、他の共著書・共著論文において、ベンガル語の標準語及びジャルコンディ方言の表出語の比較を行った他、表出語のベンガル語辞書における扱いについても記述を行った。また講演や翻訳書を通して、表出語の言語学・文学の分野横断的な研究にも成果をあげた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音象徴システムを代表する表出語の理論的研究は近年急速に進み、現在最も注目を集めているテーマの一つであるが、個別言語の実証的研究が進んでいるとは言い難い。表出語は南アジアでは語族を超えて見られる重要な地域特徴であり、中でもベンガル語は多様な表出語を持つことで知られるが、これまでそれは言語学的には形態論の一部で扱われるのが常で、その構造的分析はたち遅れていた。本研究はベンガル語の表出語の初めての本格的な言語学的分析であるだけでなく、文学と言語学の分野横断的研究への先鞭をつけた。南アジア言語学に限らず、記述言語学、言語類型論、文学の領域における音象徴システム研究に、新たな局面を切り拓いたと言える。

研究成果の概要(英文)：This project aimed to construct a database and create a dictionary of Bangla expressives which represent the sound symbolic system of the language, and to publish academic papers on the semantics and grammar of Bangla expressives on the basis of the data thus collected. The major achievement of the project is the publication of two English papers as chapters in Badenoch and Choksi (eds) "Expressives in the South Asian Linguistic Area". In this book, the chapter by Onishi and Datta deals with morphology and phonosemantics of Bangla expressives, while the chapter by Sarkar with aesthetic use of expressives in Bangla literature. In addition, Onishi analysed the expressives of the Jharkhandi dialect in comparison with the standard Bangla, and reviewed the treatment of expressives in Bangla dictionaries, in other joint papers. These achievements made a significant contribution to the study of expressives in South Asian linguistics, and descriptive linguistics/linguistic typology in general.

研究分野：記述言語学

キーワード：ベンガル語 音象徴システム 表出語 文学作品コーパス 南アジア言語学

## 1. 研究開始当初の背景

音象徴システム (sound symbolic system) は、言語音を用いて象徴的な意味を表すさまざまなタイプの語彙・文法要素を包摂する。その代表的な語類である表出語 (expressives) は、日本語の「しとしと」・「じとじと」における音節重複や無声音・有声音の対立のように、言語音を体系的に利用して話者の知覚印象や心的体験等を直接的に表出する。この語類は日本語ではオノマトペないし擬音語・擬態語、英語では onomatopoeia, ideophones, mimetics などと呼ばれることが多いが、東南アジア・南アジアの言語研究では、Roman Jakobson (1966) に由来し Diffloth (1972) や Emeneau (1969) が提唱する expressives が通用している。

表出語 (expressives) の研究は近年急速に進み、記述言語学、類型論、認知言語学、言語習得理論など、言語学のさまざまな分野で現在最も注目を集めているテーマの一つである。その大きな理由は、この語類がさまざまな言語において広汎にしかも構造的に見られることが次第に明らかとなり、言語を「シニフィエとシニフィアンとの恣意的な関係に基づく記号体系」とする西欧近現代言語学の主流の見方に再検討を迫る、根源的で射程の広い問いを提出しているからである。近年、理論的には、表出語が「散文的言語」の文法とは別のモードであるとする Diffloth (1979) の「二次元仮説」や、表出語の文法体系への統合の度合いを論じた Dingemanse (2017) や Akita (2017) の仮説等が提出されているが、こうした議論の基礎となるべき個別言語の実証的研究は、日本語やアフリカの諸言語を除けば、進んでいるとは言い難い。

Emeneau (1969) によれば、表出語は南アジアでは語族を超えて見られる重要な地域特徴の一つとされている。しかしその本格的な研究は少なく、本プロジェクトの研究代表者大西が 2016~18 年に研究分担者として参加した、科研「Expressives の類型論的研究-「恣意性を超えて」」(基盤 B: 16H03416、Nathan Badenoch 代表) での共同研究等を通して、ようやくその端緒に就いた段階である。

ベンガル語は、インド=アリア語族の言語の中でも、特に多様な表出語を含む複雑な音象徴システムを持ち、20 世紀初頭に既に国民詩人タゴールによる意味・美学的側面からの詳細な分析が行われるなど、文学者による先駆的な研究業績もある。しかし言語学的には形態論の一部で小さく扱われるのが常で、その構造的分析はたち遅れている。また辞書にも一般的に用いられる表出語の散発的な記載があるのみで、その意味記述に一貫性が見られない。

以上の認識に立ち、研究代表者大西は、上記 Badenoch 科研においても研究協力者であった Prof. Pabitra Sarkar と Mr. Durga Pada Datta を主要な海外研究協力者として、新たな科研を立ち上げ、ベンガル語の表出語を含む音象徴システムのデータ集積とその記述・分析を目指すことにした。

## 2. 研究の目的

(1) ベンガル語辞書および近現代文学作品から、標準ベンガル語の音象徴システム、特に表出語に関するデータを収集し、コーパスを構築する。

(2) 集積したデータの細かいかつ包括的な文法・意味分析を行い、それに基づく英語論文、および『ベンガル語表出語辞典』の完成を目指す。

(3) (2) を通じて、南アジア言語学、記述言語学・言語類型論、さらには言語学と文学の分野横断的な研究領域における表出語研究に、新たな局面を切り拓く。

## 3. 研究の方法

### (1) ベンガル語の表出語コーパス構築

コーパス構築に向けての辞書からの入力作業は、大西と Datta の指示の下、現地大学院生アシスタントの Kheya Samaddhar が中心となって行なった。また文学作品からの入力も、Sarkar のアドバイスのもと、Datta と大西が中心となって進めた。当初、この作業は順調に進み、かなりのデータが入力されたが、プロジェクト 2 年目 (2019 年度) から 4 年目 (2021 年度) にかけて、Covid-19 の影響で、当時オーストラリアに在住していた大西とインド現地の協力者との間のコミュニケーションや、必要な資料・機材の手配に支障を来し、入力作業の進行が遅れがちになった。その結果、一年間、プロジェクト期間を延長することとなり、最終年度 (2022 年度) 末に、ようやくインド現地で、大西、Sarkar、Datta によるミーティングを開くことができた。現在その計画に基づいて、文学作品からの入力を中心に、作業を継続しているところである。

### (2) 表出語データの文法・意味分析

(1) において集められた表出語データの文法・意味分析は、大西と Datta、および Sarkar によって、それぞれ個別に進められ、4 の研究成果で述べる二つの英語論文に結実した。これに加え、大西と Datta は、ベンガル語の西部辺境地帯に分布するジャルコンディ方言 (Datta の母語) の表出語を収集・分析し、共著論文の中で、標準ベンガル語との比較におけるこの方言の表出語

についての記述を執筆。また、別の共著論文において、大西は、ベンガル語辞書における表出語の扱いについての記述を担当した。さらに、これらの研究と並行して、大西は、2021年度より、ベンガル語文学の翻訳や招待講演などを通して、ベンガル語の音象徴に関する言語学と文学の分野横断的な研究に従事してきた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 本プロジェクトの成果

プロジェクト期間全体の最大の成果は、Badenoch and Choksi (eds) *Expressives in the South Asian Linguistic Area* における、大西と Datta の共著による章と、研究協力者 Sarkar による章の、主要論文 2 本の出版である。前者（‘Morphology and Phonosemantics of Bangla Expressives’）はベンガル語表出語の形態論・意味論的分析、後者（‘The Aesthetic Use of Bangla Expressives’）はベンガル語近現代文学における表出語の創造的な使用を論じたもので、いずれもベンガル語の音象徴システムの研究に、新たな視点を提供するものである。

長田・Badenoch 編纂の *The Dictionary of Mundari Expressives* (『ムンダ語擬音語擬態語辞典』) の中で、大西と Datta は、辞書の中の参考項目として、標準ベンガル語とジャルコンディ方言の表出語のデータを提供し、その特徴の比較に関する記述を行った。ベンガル語ジャルコンディ方言の表出語に関する記述は、おそらく研究史上初めてのものである。

さらに、Badenoch, Purti, 長田との共著論文 ‘Expressive Lexicography: Creating a Dictionary of Expressives in the South Asian Linguistic Area’ において、大西は、過去のベンガル語辞書における表出語記述のレビューを行ない、現在進行中の表出語コーパス・辞書作成について言及した。

また、大西は、2021年度より開始した二つの webpage における翻訳連載、2022年度のタゴール『少年時代』の翻訳・解説の出版、および5箇所における招待講演などを通して、ベンガル語の音象徴に関する、言語学と文学の分野横断的な研究を進展させることができた。

##### (2) 今後の展望

表出語コーパスの構築および表出語辞典の作成は、3で述べたように、現在なお継続中であり、2023年度から始まる新規科研「ベンガル語文法の総合的研究—包括的記述文法とテキスト集の作成」(基盤C: 23K00492、大西代表)に引き継がれる。また、言語学と文学の分野横断的な研究も、同様に、新規科研に引き継がれる。前者はベンガル語の記述文法作成に、また後者は文学テキスト集作成に、重要な役割を果たすことが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Nathan Badenoch, Toshiki Osada, Madhu Purti, Masayuki Onishi	4. 巻 82(1-2)
2. 論文標題 Expressive Lexicography: Creating a Dictionary of Expressives in the South Asian Linguistic Area	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Indian Linguistics	6. 最初と最後の頁 25-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Masayuki Onishi and Durga Pada Datta
2. 発表標題 Constructing a lexicon of Bangla expressives
3. 学会等名 第2回パデノック科研ミーティング
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Pabitra Sarkar
2. 発表標題 Aesthetic use of Bangla expressives
3. 学会等名 第2回パデノック科研ミーティング
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masayuki Onishi
2. 発表標題 Nandalal Base, Abanindranath and Rabindranath Tagore
3. 学会等名 Lecture, Japanese Department, Visva-Bharati University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masayuki Onishi, Akira Takahashi
2. 発表標題 Japan's Indic Fascination
3. 学会等名 Kalinga Literary Festival (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大西正幸
2. 発表標題 タゴール文学の魅力ー『少年時代』をめぐって
3. 学会等名 ASAFAS主催京都大学講演会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大西正幸
2. 発表標題 ナンダラルル・ポースと詩聖タゴール
3. 学会等名 神戸市立博物館講演会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大西正幸
2. 発表標題 タゴール文学の魅力
3. 学会等名 JAIFA主催愛媛大学講演会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

## 〔図書〕 計3件

1. 著者名 Nathan Badenoch, Nishaant Choksi, Masayuki Onishi, Durga Pada Datta, Toshiki Osada, Madhu Purti, Aung Si, Vasu Renganathan, Masato Kobayashi, Tetru Oraon, Pabitra Sarkar, Sarada Prasad Kisku, Ganesh Murmu, Gregory D.S. Anderson, Opino Gomango, Bikram Jora, Timotheus Bodt, Shailendra Mohan	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 343
3. 書名 Expressives in the South Asian Linguistic Area	

1. 著者名 Nathan Badenoch, Toshiki Osada, Madhu Purti, Nicholas Evans, Masato Kobayashi, Masayuki Onishi, Durga Pada Datta	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ILCAA	5. 総ページ数 306
3. 書名 The Dictionary of Mundari Expressives	

1. 著者名 ラビンドラナート・タゴール、大西正幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 めこん	5. 総ページ数 220
3. 書名 少年時代	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

<p>Asian and African Lexicon::ILCAA  <a href="http://www.aa.tufts.ac.jp/en/publications/lexicon">http://www.aa.tufts.ac.jp/en/publications/lexicon</a>  A Dictionary of Mundari Expressives (Academia)  <a href="https://www.academia.edu/40029612/A_Dictionary_of_Mundari_Expressives">https://www.academia.edu/40029612/A_Dictionary_of_Mundari_Expressives</a>  Dictionary of Mundari Expressives (ResearchGate)  <a href="https://www.researchgate.net/publication/335125477_Dictionary_of_Mundari_Expressives">https://www.researchgate.net/publication/335125477_Dictionary_of_Mundari_Expressives</a>  連載「ベンガル文学」(めこん)  <a href="https://bengaliterature.blog.fc2.com//">https://bengaliterature.blog.fc2.com//</a>  タゴール 『子供時代』(日印文化交流ネットワーク)  <a href="https://tsunagaru-india.com/series/%e3%82%bf%e3%82%b4%e3%83%bc%e3%83%ab%e3%80%8e%e5%ad%90%e4%be%9b%e6%99%82%e4%bb%a3%e3%80%8f/">https://tsunagaru-india.com/series/%e3%82%bf%e3%82%b4%e3%83%bc%e3%83%ab%e3%80%8e%e5%ad%90%e4%be%9b%e6%99%82%e4%bb%a3%e3%80%8f/</a></p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------